

は積極的な可能性について語っているが、それは、「訓戒と恩恵について」(De Correctione et gratia)の書物「二・三三」⁽¹⁷⁾の中のアウグスティヌスに明白に反するものである。その書物でアウグスティヌスは、「もし意志があったならば、行為する能力を受け取っていたはずである。しかしながら行為を可能ならしめる意志をもっていなかった」と言っている。彼は「能力」ということによって消極的可能性を意味し、「行為を可能ならしめる意志」によって積極的可能性を意味している。

しかし第二の部分は、この教師によって同じ篇の中に十分に明らかにされている。

一六

人間がとにかく自分自身のなかにあることをなすことによって、恩恵に達しようと考えているならば、罪に罪を加え、その結果二重に罪あるものとなるのである。

なぜならすでに述べられたことから、人間は自分自身のうちにあることをなす時に罪を犯し、完全に自分自身を求めようとしているということが明らかだからである。しかしもし罪によって自分は恩恵に値するものになると考えたり、また恩恵を受ける資格があるものになると考えるならば、すでにその時には傲慢な違反を加えているものであり、罪を罪とも信ぜず、悪を悪とも信じないものであって、これこそはただ大きい罪である。このようにエレミヤ二章「二三節」に、「それは私の民が二つの罪を犯したからである。すなわち生ける水の源である私を捨てて、自分で水を入れておくことのできないこわれた水ためを掘った」としている。すなわち罪によって私からはるか遠くへだたり、しかも自ら善をなしていると勝手に仮定しているのである。

C.387

それゆえ、あなたがそれならば、私たちは何をしたらよいだろうか。私たちがすることは罪にすぎないのであるなら、何もしないでいるほうがよくはないであろうか、と言うならば、私は答える。そうではない。これらのことを聞いて、あなたはひれ伏し恩恵を祈り求め、あなたの希望を私たちの救いと生命と復活とがあるキリストに置き、と。それは罪の認識によって恩恵が求められ、獲得されるためにこれらのことが教えられ、また律法が罪を明らかにするからである。かくして「へりくだる者に恵みを賜う」[第一ペテロ五・五]また「自分を低くするものは高くされるであろう」[マタイ二三・一二]と言われている。律法は低くし、恩恵は高くする。律法は恐れと怒りをつくり出し、恩恵は希望とあわれみをつくり出す。「なぜなら、律法によっては罪の自覚が生じるのみである」[ローマ三・二〇]。しかし罪の認識によって謙遜が、謙遜によって恩恵が得られるのである。こうして義人たらしめるために、罪人たらしめつつ神の非本来的なわざ(opus alienum)は、ついに神の本来的なわざ(opus proprium)を導き出す。

一七

このように言うのは、絶望する原因を与えるためではなく、謙遜となる原因を与えるためであり、キリストの恩恵を求めることを学ぶように刺激するためである。

このことはすでに述べられたことから明瞭である。すなわち福音書に従えば「マルコ一〇・一四」、幼児たちと謙やかな人々に天国があり、キリストもまた彼らを愛したもうのである。しかし自らが呪われるべき嫌すべき罪人であることを知らない者は嫌そんではありえない。だが、罪は律法によるのでなければ認識されえない。私たちが

罪人であることが宣べられているときには、絶望ではなくて、むしろ希望が説教されていることが明らかになるのである。なぜなら、このような罪の説教、あるいはむしろ罪の認識とそのような説教への信仰こそは、恩恵にいたる準備だからである。なぜなら罪意識が生じた時こそ、恩恵への熱望もまた現われるからである。病人は自分の病状の悪いことを知る時に治療を求める。こうして病人に対して彼の病状の危険なことを語る時、それは絶望の原因または死の原因を与えるためではなく、むしろ治療を求める心呼び起こすためである。すなわち、私たちが自分自身のうちにあることを行なうとき、私たちは無であり、常に罪を犯しているということを語ることは、(愚か者でないかぎり)絶望させるのではなく、私たちの主イエス・キリストの恩恵を願って求める者にさせるのである。

一八

キリストの恩恵を獲得するのにふさわしいものになるために、人間は自分自身に徹底的に絶望しなければならぬということとは確かなことである。

なぜなら律法は次のことを欲するからである。すなわち使徒がローマ二章と三章に、「私たちはことごとく罪の下にあることを、私たちはすでに指摘した」[「ローマ三・九」と述べながらさし示しているように、もし人を「陰府にくだし」また「貧しくし」[「サムエル上二・六七」、そしてすべてのわざにおいて罪人であるということを示すことによって、人間が自分自身に絶望することを欲するのである。自分自身のうちにあることを行ない、また自分が何かよいことをできると信じている者は、自分自身が全くむなしいものであるとは考えられないし、また自分自身の力に絶望することもなし、自分自身の力によって恩恵に至ろうとするゆえに、かえって不遜をあえてするのである。

自分自身の力に絶望することもなし、自分自身の力によって恩恵に至ろうとするゆえに、かえって不遜をあえてするのである。

一九

神の「見えない本質が」、「造られたものによって理解されると認める」者は、神学者と呼ばれるにふさわしくなく[「ローマ一・二〇」]。

このことは、このようなことをなしてき、また使徒によってローマ一章[二二節]で「愚か者」と呼ばれている人々によって明らかである。更にまた、神の見えない本質は、力、神性、知恵、義、善……等である。これらすべてを認識することは、価値ある者にするのではなく、知恵ある者にするということでもない。

二〇

だが、神の見える本質と「神のうしろ」[「出エジプト三三・二三」とが、受難と十字架とによって理解されると認める者は、神学者と呼ばれるにふさわしい。

神のうしろと神の見える本質とは、見えない本質の反対である。すなわち第一コリント一章[二五節]に、「神の愚かさと神の弱さ」と言われているように、それは人性と弱さと愚かさである。なぜなら人間がわざによって神認識を誤り用いるので、かえって神は受難によって認識されることを欲したまい、そしてまたかの見えないものの知恵を、見えるものの知恵によって否定しようと欲したもうたのであるが、それはみわざによって示された

ままの神をあがめない人々をして、ちょうど第一コリント一章(二節)に、「この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは神の知恵になつてゐる。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救ふこととされたのである」と言われているように、受難の中に隠されていたもうかたとしてあがめさせるためだからである。したがって神を栄光と尊厳において認識しても、十字架の謙遜と恥辱において認識しないならば、十分といえないし、また無益であろう。こうして「神は知者の知恵を滅ぼし……」(第一コリント一・一九)、またイザヤは「まことに、あなたは隠された神である」(イザヤ四五・一五)と言っているのである。こうしてヨハネ一四章(八節)には、ピリポが栄光の神学に従つて、「私たちに父を示してください」と語ったときに、キリストは直ちに彼をおしとどめ、神を他に求めようとする早急な認識をご自身の中に引き入れたらうで、「ピリポよ、私を見た者は私の父をも見たのである」(ヨハネ一四・九)と語られた。それゆえ十字架につけられたもうたキリストの中に、まことの神学と神認識が存する。また、ヨハネ一〇章に、「だれでも私によらないで、父のみもとに行くことはできない」(ヨハネ一四・六)、また「私は門である」(ヨハネ一〇・九)ともしるされている。

一一一

栄光の神学者は悪を善と言い、善を悪と言う。十字架の神学者はそれがあるがままの姿で言う。

このことは明瞭である。キリストを知らないかぎり、受難の中に隠れていたもう神を知らないからである。それゆえ、このような人は受難よりはわざをえらび、十字架よりは栄光をえらび、弱さよりは力をえらび、愚かさ

よりは知恵をえらび、普遍的な言い方をすれば、善よりは悪をえらぶのである。これらの者たちこそ、使徒が「キリストの十字架の敵」(ピリピ三・一八)と呼んでいる者である。なぜなら、彼らは十字架や受難を憎んで、実にわざとわざの栄光とを愛する。そして十字架の善を悪とよび、わざの悪を善とよぶからである。しかし神は受難と十字架における以外は決して見いだされないのであつて、このことはすでに述べられている。それゆえ十字架の友は、十字架は善であり、わざは悪であると言う。それは十字架によってわざが破壊され、わざによればむしろ建てられるところのアダムが十字架につけられるからである。まず受難と悪によってむなくされ破壊されて、自分自身は無なるものであり、自分のわざは自分のものではなく神のものであるということを知るのではないならば、自分の善きわざによって高慢にならないようにすることは不可能である。

一一二

神のみえない本質をわざによって理解しようと認めるような知恵は、人間を完全に高慢にし、盲目にし、そしてがんにする。

これはすでにのべられたことである。十字架を認めず憎むゆえに、必然的に反対のもの、すなわち知恵、栄光、力などを喜ぶからである。それゆえこれらのものを愛することにより、ますます盲目になり、がんになる。貪欲は欲求するものを獲得しても、それに満足することは不可能である。それは、金銭そのものが増加すればするほど、金銭への愛も増していくように、魂の水腫症は、ちょうど詩人が、「水をぐいぐい飲めば飲むほど、水にかわくものである」と言っているように、飲めば飲むほどかわくのである。これはちょうど伝道一章(八節)に

も、「目は見ることに飽きることがない。耳は聞くことに満足することがない」と言っているとおりである。このようにすべての食欲についても同様である。

知識欲もまた、獲得した知恵によって満足しませんが燃やされる。このように榮譽欲も、獲得された榮譽によって満足できないし、支配欲も権力と支配によって満足できないし、名譽欲も名声によって満足できない……。ヨハネ四章「二三節」において、キリストが、「この水を飲むものはまたかわくであろう」と言っていて、それを意味していたもう。

治療薬はまだ△一つだけ▽残っている。それは欲望を満足させることによって治療するのではなくて、それを絶滅することによって治療するのである。すなわち、賢い人になろうと思ふ者は、すすんで知恵を求めていくのではなく、退いて愚かさを求めて愚か者となるべきであるというのである。このように権力者、榮譽者、喜びにあふれた者、すべてのことに満足した者になろうとする者は、能力、榮譽、歓喜、そしてすべてのことに満ち足りることを求めるよりは、むしろ避けるべきである。このような知恵こそは、この世にとって愚かなことである。

二二三

そして律法は神の怒りを招き「ローマ四・一五」、キリストの中にいない者を苦しめ、のろい、告訴し、さばき、そして永遠の罰に定める。

ガラテヤ三章「二三節」に、「キリストは私たちが律法ののろいからあがない出して下さった」としてなされている。そしておなじ所に「ガラテヤ三・一〇」「律法の行ないによる者は、皆のろいの下にあるからである」としてな

れている、そしてまたローマ四章「二五節」に「律法は怒りを招く」とある。またローマ七章「一〇節」に「いのちにいたらしめる律法が、私にとっては死にいたらしめることがわかった」とある。ローマ二章「一二節」に「律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる」とある。それゆえ、あたかも律法において賢い者または教師であるかのように誇るものは、かのローマ二章「二三節」に「なぜ律法を誇るのか」としてなされているように、自分の恥、自分ののろい、神の怒り、死を誇っているのである。

二二四

しかしこのような知恵も悪ではなく、また律法も避けるべきものではない。十字架の神学なしでは人はむしろ最善のものを最悪のものと誤用するのである。

なぜなら、律法は聖なるものであり「ローマ七・一二」、神のすべてのおくりものは良いものであり「第一テモテ四・四、ヤコブ一・一七」、創世一章「二三節」にあるように、すべての造られたものは良いもの、だからである。しかし、すでにのべたように、十字架と受難によってうちやぶられ無にされない者は、だれでもわざと知恵を自分に帰して神に帰さない。そしてこのようにして神の賜物を誤用し、汚すのである。

受難によってむなしくされた者は、もはや自ら働かないで、神が自分の中に働きたまひ、すべてのことを導きたまうことに気づくのである。それゆえ彼が働くかそうでないかは彼にとっては同じことであり、自分が働いても決して誇ることはしないし、神が彼の中に働きたまわなくとも決して狼狽しない。十字架によって苦しみぬぎ、打ちやぶられ、その結果ますます無に帰せられるならば、それで十分であることを彼は知るのである。しかしこ

のことは、キリストがヨハネ三章「七節」に、「あなたがたは新たに生まれかわらなければならない」と言っているところである。もし生まれかわろうとするならば、それゆえまず死に、次いで人の子とともに高く上げられるのである。死ぬということは換言すれば、それは死を現在のものとして感ずることである。

二一五

▲善き▽わざを大いにす者が義ではなく、わざはなくとも、キリストを大いに信ずる者が義である。

なぜなら神の義は、アリストテレスが教えたように、しばしばくり返されて行なわれる行為によって得られるものではなく、信仰によって注ぎ込まれる。ローマ一章「七節」には、「信仰による義人は生きる」としてされており、また一〇章「一〇節」には、「人は心に信じて義とされる」としてされている。したがって、私はそれを「わざなし」と解したい。義人はいかなるわざをもなさないということではなく、彼のわざは彼自らの義をつくるものではなく、むしろ、彼の義が彼のわざをつくるということである。なぜなら、私たちのわざなしに恩恵と信仰が注ぎ込まれ、それらがそそぎ込まれることによってわざが続くからである。こうしてローマ三章「二〇節」には、「律法を行なうことによっては、すべての人間は神の前に義とせられない」としてされており、またローマ三章「二八節」には、「私たちはこう思う、人が義とされるのは、律法の行ないなしに、信仰によるのである」。すなわち、わざは義にいたるためには何の役にも立たないのであるとされる。したがってこのような信仰からすわざは、自分のものではなく神のものであることを知っているので、自らのわざによって義と

され栄光をうけることを求めず、神を求めるのである。彼自身にとっては、キリストへの信仰によって▲与えられる▽義で十分である。すなわち第一コリント一章「三〇節」に、キリストは彼の知恵、義などと書いてあるように、彼は実にキリストの働きであり、もしくはキリストの道具である。

二一六

律法は「これをしなさい」と言うが、何も行なわれない。恩恵は「これを信じなさい」と言うが、すべてのことがすでになされている。

最初の部分は、使徒とその解釈者である聖アウグスティヌスとの多くの個所によって明らかである。「律法はむしろ怒りをつくり出していき」、すべてのものをのろいの下に閉じ込めるものであるということは、すでに十分に述べられたことである。第二の部分も同じように明瞭である。なぜならば、信仰が義とし、そして（聖アウグスティヌスが言っているように）「律法は信仰が成就するものを命ずる」からである。このようにキリストは信仰によって私たちのうちにいまし、確かに私たちと一つになりたもうからである。そしてキリストは義なるかたであり、また、神のすべての戒めを満たしたもうかたである。それゆえに信仰によって▲キリストが▽私たちにものにされるかぎり、私たちもキリストによってすべての戒めを満たすのである。

二一七

キリストのわざは働きかけるわざ (opus operans) であって、私たちのわざは働きかけられたわざ (opus

operatum)であるとみなしたことは正しい。それゆえまた、このように働きかけられたわざは働きかけるわざの恩恵によって神に喜ばれるのである、とみなしても正しいのである。

なぜなら、キリストが私たちの中に信仰によって住みたまうやいなや、彼は彼のみわざに対する、かの生ける信仰によって、私たちをわざへと動かしたもうからである。それゆえ彼自らなしたもうみわざというのは、私たちに与えられた神の戒めを信仰によって満たすことであり、私たちが注意深くみると、私たちはキリストのわざにならおうとするようになる。それゆえ使徒は、「あなたがたは、神に愛されている子供として、神にならう者になりなさい」(「エペソ五・二」と言っている。それゆえ、あわれみのわざは、私たちを救ったキリストのみわざによって燃えたとせられる。このことは聖グレゴリウスが「キリストのすべての行為は私たちの教えであり、実に刺激である」と言っているとおりである。彼のみわざが私たちの中にあるとすれば、それは信仰によって生きているのである。「あなたの後について私を行かせてください。あなたのおい油の香り——すなわちあなたのみわざ——の中で私たちは走ろう」(「雅歌一・三—四」という句に従って、激しく私たちを誘うからである。

二一八

神の愛はその愛するもの△対象▽を見いだすのではなく、創造するのである。人間の愛はその愛するもの△対象▽によって成立する。

C. 392

後半は明瞭である。そしてすべての哲学者と神学者の△言っているところ▽である。なぜなら、アリストテレスによれば、心のすべての能力は受動的なもの、質料的なものであり、受容をまったく働くものであると考えたと、

W. 365

対象が愛の原因であるからである。こうしてアリストテレスの哲学は、すべてのものの中に自己のものを求め、かつ善きものを与えるよりもむしろこれを受け取るがゆえに、神学と相反するものであることが証明される。前半も明瞭である。なぜなら、人間の中に生きている神の愛は、罪人、悪人、愚か者、弱い者を愛し、こうして彼らを義人、善人、賢い者、強い者にし、かくてむしろ流れ出て行って、善いものを与えるからである。それゆえ罪人は愛されているがゆえに美しいのであって、美しいがゆえに愛されるのではない。人間の愛は罪人や悪人を避ける。こうしてキリストは、「私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(「マタイ九・一三」と語りたまうた。そしてこのようなものこそ十字架から生まれる十字架の愛である。この愛は、享受することのできる善に出会う場所ではなく、むしろ悪しきものや悲惨なものに善を与える場所におもむくのである。「受け取るよりは与える方がさいわいである」(「使徒二〇・三五」と使徒は言っている。だから詩篇四一篇(「二節」)に、「悲惨なる者と貧しい者とをかえりみる人は幸いである」とある。しかし生まれつきのままでは、無なるもの、すなわち貧しいもの、あるいは悲惨なものは知性の対象とはなりえず、存在するものや真なるものや善なるものが知性の対象となるのである。それゆえ知性は外観によって判断し、人間の外面を受け入れ、そして目に見えるところにしたがって判断するのである……など。

終わり